

## 農村で有効な子どもの健康改善 4年半のプロジェクト成果から

カンボジア事務所

清<sup>せい</sup> モーガン 三恵子  
山瀬 直子

### カンボジアの子どもの健康状況

カンボジアは、いまだ内戦の影響が大きく、周辺国と比べて子どもの死亡率が高い状況にあります。栄養は、子どもの健康と心身の発達に様々な影響を与え、ユニセフによれば5歳未満で亡くなる子どもの約半数が栄養不良に関わる」とされています。5歳未満児の低体重児（WHO基準を使用したUnderweight：年齢に対して低体重）の割合は、都市部14・8%に対し農村部では25・4%であり、4人に1人が低体重です。カンボジアの保健政策では、「母子保健ケアのサービスの質と効果の改善を通じた、栄養状態も含む母子の健康状態の改善」が、優先事項として位置づけられています。

### 栄養改善を軸とした健康改善

シエアのカンボジアプロジェクトは、1992年から始まります。現在の活動地であるプレイベン州スバイアントー郡では、2008年より母子保健プロジェクト

クトを開始し、保健行政及び保健センターと協力して活動を実施してきました。プレイベン州はカンボジアの全国平均と比較して子どもの健康指標が悪い州の一つです。2011年にシエアが実施した調査では、2歳未満児の慢性の栄養不良児（WHO基準を使用したStunting：年齢に対して低身長）率は25・7%でしたが、

生後18カ月から23カ月の子どもでは43・8%と、月齢が上がるにつれて栄養状態が悪くなっていました。また、乳幼児が罹る病気の7割が下痢や呼吸器感染症など予防可能な病気で占められており、重症化してから交通費をかけて首都の病院を訪れる人が多いことも明らかになりました。こういった状況を改善するために、2011年3月から2015年9月にかけて、栄養改善を軸とした「子どもの健康増進」に焦点をあてたプロジェクトを実施しました。①予防、②異常の早期発見・診断、③治療の3本柱の活動が、地域の人びとによって自発的に行われ定着していくことを目指し、地域の保健人材の育

### プロジェクトがもたらした主な成果

#### 成果1…乳幼児健診の普及

事業対象の5カ所の保健センターが管轄する79カ村において、2008年時点では全く行われていなかった乳幼児健診が、2012年には年間157回（各村での実施を1回とする）、2014年には301回行われ、そのうち約7割（216回）はシエアのサポートなしで、保健ボランティアと保健センター・スタッフによって自主運営されました。また、2015年には対象地域の全ての村で乳幼児健診が実施されました。

#### 成果2…保健センター・スタッフの行動変容

乳幼児健診により子どもの栄養状態が把握できるようになり、活動の継続とともに栄養不良児が減少するという成果が数値化されることで、これまで予防よりも治療を重視していた医療者の意識にも変化が生じ、予防活動や異常の早期発見のための健診活動に積極的に取り組むようになりました。

成と連携強化に取り組んできました。  
具体的な活動内容

#### ①予防

保健センターが各村で実施するアウトリーチ（予防接種などの出張サービス）の場で、2歳未満の子をもつ養育者を対象に、各村の保健ボランティアと保健センターの看護師が、家庭でできる予防やケアに関する保健教育を実施しました。また、乳幼児の月齢に応じ栄養のある離乳食を家庭で実践できるよう、離乳食教室を開催しました。

#### ②異常の早期発見・診断

保健センターと保健ボランティアが協働して実施する包括的乳幼児健診活動（以下、乳幼児健診）に取り組みました。健診の場では、保健ボランティアが子どもの体重を測定し、保健省より配布される「イエローカード」と呼ばれる子どもの健康手帳上の成長曲線と呼ばれるグラフに

#### 成果3…低体重児率の減少

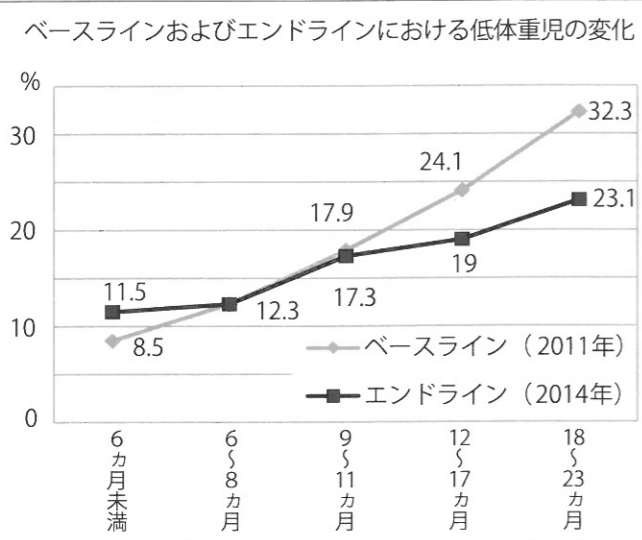
2011年のスバイアントー郡におけるベースライン調査で低体重児率が32・3%と最も高く、プロジェクトで10%減を目標としていた18〜23カ月児においては、2014年12月の時点から23・1%まで減少し、統計学的にも有意差が見られました。2015年9月のプロジェクト終了までに10%減を達成できたと見込んでいます。



乳幼児健診に来た母親に、成長曲線グラフを見せながら子どもの栄養状態について説明するシエアスタッフのファン。

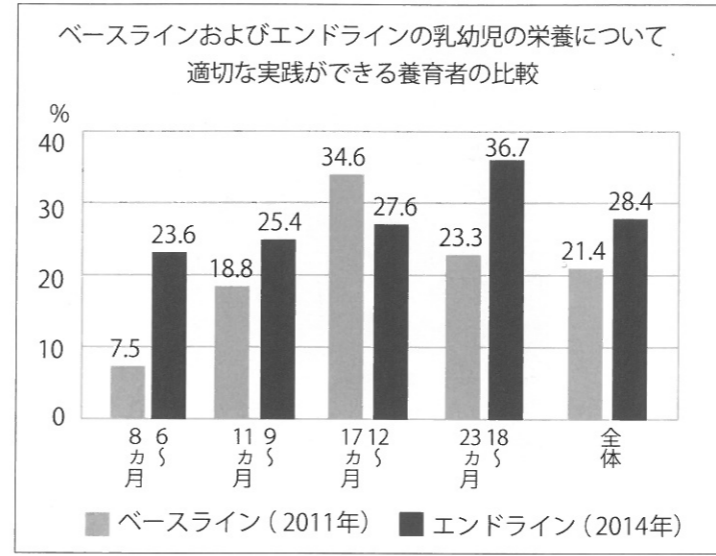
#### ③治療

保健センターの看護師が、健診で見つかった栄養不良児の養育者から、食事の与え方や家庭での保健状況を聞き取り、個人の状況にあったアドバイスを行いました。重度の栄養不良や合併症を伴う場合は、治療のために保健センターや州病院等へ搬送しました。地域においては、保健ボランティアによる家庭訪問での保健教育や見守り、次回の健診への参加の励ましといったフォローアップに取り組みました。



成果4：養育者の行動変容

6〜23カ月月児の適切な栄養摂取（母乳や離乳食の与え方（質・量・頻度））に関して、2011年のベースライン調査時にはWHOの基準に達している養育者は21・4%であったのに対し、2015年のエンドライン調査では28・4%まで増加し、カンボジアの全国平均24・0%を上回る結果となりました。



もうひとつの成果  
対象地域内外へのインパクト

乳幼児健診の実施だけでなく、定期的な会議を開いて課題や運営についての話し合いもサポートしてきました。保健センターと保健ボランティアの関係が強化されたことにより、地域住民の公的保健サービスに対する信頼が向上しました。その結果、子どもが病気になった際に、多くの養育者が保健センターに連れて行くようになりました。また、保健ボランティアから健診等の結果が記入された活動報告が毎月保健センターに提出されるようになったことで、保健センターから郡保健行政への地域保健情報の報告システムが改善されました。

このデータをもとに、郡保健局長が保健センター長月例会議で栄養不良児の状況を発表したところ、シェアの活動の対象外の保健センターでも、自主的に乳幼児健診を実施しているという報告がされるようになりました。また、研修や会議

にコミュニケーション。評議会のメンバーを巻き込んだことにより、地域全体が子どもの栄養改善活動に理解を示し、これまで縦割りであった保健行政と地域行政の協力関係も改善されました。この結果、対象地域の複数の保健センターでは、保健行政で予算が確保できていない離乳食教室について、コミュニティの年間予算で活動実施費用を獲得することに前向きな姿勢を示すコミュニケーションが現れるようになりました。

栄養改善に有効な2つのポイント

この事業の経験から、栄養不良児率の改善に有効なポイントが2つあると考えられています。

一つ目は、中程度の栄養不良段階での発見・サポートです。栄養不良の状態が長期間続いたり、重度の栄養不良の状態に陥ると、子どもは病気にかかりやすく、病気にかかることでさらに栄養不良状態が悪化し、改善が難しくなってしまう。治療にかかる家族の負担が大きい農

村では、栄養状態が悪化してから対処するのではなく、中程度の段階での栄養不良児の発見（乳幼児健診による成長モニタリング）と、家庭でできるケアと地域での見守り（養育者へのカウンセリングと保健教育、各ケースに合わせた指導とフォローアップ）が有効です。

2つ目は、地域のことや住民の状況を知り尽くした保健ボランティアの存在です。栄養不良児の支援を含む地域保健の改善には非常に重要であると考えています。そのためには、定期的な研修の機会や交通費といった最低限の金銭的サポートの確保、また、自分の地域の子どもの健康改善そのものが、彼らのモチベーションとなるような働きかけが必須であると考えています。\*\*\*

1 Committing to Child Survival: A Promise Renewed - Progress Report 2015: UNICEF 2015  
2 Cambodia Demographic and Health Survey 2014  
3 このプロジェクトにおいて導入した活動で、従来行われていた予防接種や微量栄養素投与に加え、成長モニタリング、問診、保健教育を主にアウトリーチ・サービスによって提供し、問題の早期発見と対応を行うものである。  
4 事業開始時の状態を把握し、事業終了時と比較するための調査。  
5 WHO's Infant and Young Child Feeding (IYCF) 指標に準拠。  
6 カンボジアの行政区の最小単位。集落や、地区、町などで扱われる。

現地の人声 トラバエレック村の姉妹



ヨンさん(左、姉)、ティダさん(右、妹)



乳幼児健診での体重測定。



保健ボランティア対象の研修。

ヨンさん

トラバエレック村のお母さん

私には3歳になる子どもがおり、もうすぐ二人目が生まれます。妹が保健ボランティアなので乳幼児健診への参加を呼びかけてくれます。これまで子どもには大人と同じ食事や白粥を与えていましたが、あまり食べてくれず困っていました。村の離乳食教室に参加して三大栄養素を含んだお粥の作り方を学び家で実践したところ、たくさん食べてくれるようになりとても嬉しかったです。私たち母親にとって、こういった子どもの健康や子育てについて勉強できる機会はとても貴重です。まもなく産まれてくる子どもも元気に育ててもらいたいため、健診に定期的に参加しようと思います。

ティダさん

トラバエレック村の保健ボランティア

自分の住む村の人たちや子どもたちのために何かしたいと思って保健ボランティアになり、2年が経ちます。村での乳幼児健診に子どもたちを集めたり、健診の場で母親へ保健教育を行っています。また、栄養不良の子のいる家庭を定期的に訪問し、養育者に保健教育を行います。活動を通して、保健の知識が増えたり、伝え方が上達し、地域の人々の健康改善に役立つことができてもやりがいを感じています。保健ボランティアとしての一番のやる気の源は、村の人たちが信頼してくれることです。これからも地域の未来を担う子どもたちのために、少しでも貢献していきたいです。

